拓水

TAKUSUI
No. 675

1
January. 2013

発行　㈶兵庫県水産振興基金

兵庫の漁業人のための情報誌

姫路市播磨国総社（射楯兵主神社）の初詣の光景

新年のご挨拶

第1回 乾のり入札会開催！

「ひょうご海の子」作品受賞者決定！

～兵庫から未来を拓く～

兵庫県知事　井戸敏三

初春のお喜びを申しあげます。

世界の主要国で次代のリーダーが決まり、新しい国際秩序の構築が求められています。私たち日本も新たな枠組が決まりました。成熟社会にふさわしい社会システムへの転換に向けた歩みを進めなくてはなりません。

人口減少や高齢化を悲観するのではなく、変化に対応しつつ、これまで築いてきた知恵や資源を活かして豊かな地域社会をつくる好機とすべきです。世界に開かれた歴史や文化を有し、多様な人材を輩出して日本をリードしてきた兵庫が、今こそ持てる力を十分に発揮し、未来を拓く先頭に立って歩んでいこうではありませんか。

一つには、安全安心の基盤をつくる。南海トラフ巨大地震や頻発する風水害への備えに万全を期すとともに、医療、福祉など暮らしを支える基盤を確保します。

二つには、質の高い生活をつくる。次代を担う人づくりを進めるほか、高齢者や女性の活躍を応援し、誰もが生きがいや豊かさを実感できる社会をめざします。

三つには、新時代の経済社会をつくる。最先端の科学技術基盤を活かした新産業創出、農水産物のひょうごブランド戦略の推進など、世界と競える産業をつくります。

四つには、地域の元気をつくる。交通基盤を充実しつつ、地域再生大作戦やツーリズム振興など、内外との交流の促進を通して地域の活性化を図ります。

こうした取組を自らの判断と責任で進めるため、地方分権改革を関西広域連合と一体となって推進するとともに、第二次行革プランの総点検を行い兵庫の自立をめざします。

さあ、二十一世紀兵庫長期ビジョンのもと、県民みんなの知恵と力、ふるさと兵庫への思いを結集し「創造と共生の舞台・兵庫」をつくりあげていきましょう。

新時代　拓く基は　県民の
知恵と資源を　生かす志

CONTENTS

No.675　January. 2013

2　新年のご挨拶
7　由良町漁業協同組合 発足 ～ＪＦ由良町中央・ＪＦ由良が合併しました～
第37回通常総会 開催される
8　第1回乾のり入札会を開催
9　砂問題について考える「第1回 砂問題研究会」～豊かな森川海を育てる会が公開講座を開催～
10　ようそろ《還暦の歳に思う》
女性部ら総出でカキ汁を振舞う ～観光バス38台で賑わう室津港～
11　「豊かな森川海を育てる会」主催の 砂防堰堤見学会に参加しました
12　平成24年度「ひょうご海の子作品展」受賞者決定!!
14　JF兵庫漁連が開発した浮力合羽 ～販売総数 1,500着を突破～
15　兵庫JCC通信
16　旬に想う　寸・尺・メートル
大輪田塾だより「播磨灘の栄養塩状況と食育運動」
表紙の言葉　初詣

新年のご挨拶

年頭のご挨拶

兵庫県漁業協同組合連合会
代表理事会長
山田　隆義

新年　明けましておめでとうございます。

平成25年の年頭にあたり、県内ＪＦ組合員の皆様ならびにＪＦグループの皆様に謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

第37期の本会事業は、のり養殖業や船曳網漁業が順調に推移したことから、購買事業・販売事業のほとんどで計画を大きく上回る実績を上げることができ、昨年末には会員に対して出資配当並びに事業分量配当を実施することができました。これもひとえに会員ＪＦをはじめ系統団体、関係各位の皆様方のご支援・ご協力の賜物であり、改めて感謝申しあげます。

さて、昨年は、国連が定めた国際協同組合年であり、日本各地において、各協同組合が連携して様々な運動が実施されました。その中でも、ＩＣＡアジア太平洋地域総会並びに協同組合フォーラムが本県で開催され、ＪＦグループの協同組合としての役割を広く国民にアピールできた事は、誠に意義深いものでありました。

漁業を取巻く環境については、原発事故による風評被害や高齢者にまで及んできた魚離れなどによる魚価の低迷、そして漁場環境の悪化や原油価格の高止まりなど厳しい状況が続きました。

本会としては、この様な厳しい状況を強く認識しつつ、平成23年6月に策定した第2次中期経営計画に掲げた基本方針である『漁場の再生』、『漁業の振興』、『漁業と消費者をつなぐ活動』、『協同意識の啓発』ならびに『組織と事業の改革』に基づき諸課題に取り組みました。

特に、『漁場の再生』については、瀬戸内海関係漁連・漁協と連携して、過去の公共工事や現在の総量規制が関係する、漁場環境の悪化に対する改善を国に訴える活動に取り組んだ結果、昨年6月に関係国会議員による「瀬戸内海再生議員連盟」の設立に至りましたし、県内各地で漁業者と農協、生協、一般県民と連携して〝森づくり〟や〝かいぼり〟に取り組む等、漁場再生の意識が急速に高まってきました。

また、『漁業と消費者をつなぐ活動』については、ＳＥＡＴ―ＣＬＵＢを核に料理教室の活動拡充により、参加者は10、000人を超えるなど、消費者とのパイプは年々太くなっています。

一方、昨年は海難事故の多発により尊い命が次々と奪われ、関係者の悲しみとともに、事故防止が大きな課題となりました。本会としても系統全体で協力しての海難事故防止運動を展開しておりますが、特に転落事故に対応するため「浮力合羽」の開発・普及に努めておりますが、これからも死亡事故0を目指し、引き続き一層の力を注いで参りますので、漁業者お一人おひとりのご理解とご協力を強くお願い申しあげます。

さて、現在の漁業は自然環境や社会情勢に大きく左右される状況が続いており、今後も厳しさが続くことが予測されますが、協同組合の原点である「相互扶助の精神」のもと、アクションプランの推進や、第2次中期経営計画を核とした本会の経営改善に努め、会員各位の期待に応えるよう全力で取り組んで参る所存であります。

こうした状況下で、昨年12月の衆議院選において政権が交代し、燃油高騰対策の拡充、水産物の消費拡大、魚食普及対策等の実現に期待しているところですが、これから再度浮上してくるＴＰＰ問題も含め、さらにＪＦグループが政治力を結集し漁業経営の安定化を図るためには、国・県に対して政策提案を行っていくことが必要であり、会員・所属員、関係団体のより一層のご理解とご協力と、関係機関の温かいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

年頭にあたり、本年が漁業にとって明るく希望の持てる年となりますとともに、皆様のご繁栄とご健勝を祈念いたしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。

新年のご挨拶

兵庫県信用漁業協同組合連合会
代表理事会長
山田 峰人

新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、会員並びに組合員の皆様に謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆様には、日頃より本会業務の運営に格別のご尽力を賜り厚くお礼申し上げます。

わが国経済は、海外景気減速等を背景として、昨年夏以降、輸出が落ち込み、生産は減少傾向が続き、企業の設備投資に対する慎重姿勢が継続される中、雇用情勢も改善の動きに足踏み状態が続いています。一方で、米国や中国には改善の兆しも現れつつありますが、欧州政府債務危機をはじめ世界景気には種々の下振れ懸念が我が国経済の下押しリスクとなっています。さらに、いくつかの地域経済は、円高のほか、世界景気の減速の影響等を受けて厳しい状況にあります。

このような状況下、我が国水産業におきましては、東日本大震災による甚大な被害、水域資源状況の悪化、漁業生産構造の脆弱化、燃油価格の高騰といった厳しい現状の中、政府は、新たに策定した水産基本計画に基づき、水産基本法の基本理念である「水産物の安定供給の確保」と「水産業の健全な発展」の実現に向け取り組んでおり、東日本大震災からの復興と水産施策を実施するため平成25年度水産予算は前年度を大きく上回る概算要求となりました。

さて、本会におきましては昨年6月に新たに策定した中期経営計画に基づき、これまで進めてきた「信用事業安定運営責任体制（あんしん体制）」への取組継続により、組合員・利用者の皆様がより安心できるメインバンクとなることを目指し、体制整備、金融力強化、健全性強化に向け取り組んでいます。

海苔養殖漁業並びに船曳網漁業が好調であったことや地域への積極的な貯蓄推進により貯金残高は前年同期を上回る状況で推移しており、引き続き貯金量の拡大に努めてまいります。また、融資業務につきましては、新規設備投資に伴う資金需要は依然として低迷しておりますが、国の利子補給事業や農林中央金庫による利子助成制度を有効に活用した資金の融資を促進いたします。さらに、平成25年3月まで延長となった金融円滑化法に基づき、地域の金融円滑化を本会の社会的使命と認識し取り組んでまいります。

経営環境は、引き続き厳しいものと予測されますが、役職員一丸となって努力してまいりますので、一層のご支援、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、本県水産業のさらなる発展と皆様方のご健康とご多幸を祈念申し上げ新年のご挨拶といたします。

年頭のご挨拶

兵庫県漁業共済組合
組合長理事
上村 広一

県下漁業関係の皆様、新年明けましておめでとうございます。初春にあたり、皆様のますますのご健勝とご多幸を衷心よりご祈念申し上げます。

さて、昨年も色々な事がありました。年当初には、イランが核開発疑惑による制裁の対抗手段として、ホルムズ海峡封鎖の動きという非常に緊迫した状況が伝えられましたし、その後、イタリアの豪華客船が座礁し、最後まで一般客を避難誘導するべき船長が真っ先に避難したという唖然とする報道もありました。それに引き換え今更という思いはありますが、大震災の大津波がやってくる中で、ある役場の女性職員が有線放送でもって「最後の瞬間」まで町民に避難を呼びかけたその勇姿こそ、誠に立派であると言わざるを得ません。引き続き地震関連になりますが、M7以上の関東直下型地震が、今後4年以内に発生する確率が70％以上（その後50％以下に修正）であるという報道や、今後予想される南海トラフ地震による津波高予想で、一部地域では最大34mに達するという報道もありました。俗に「備えあれば憂いなし」とは言いますが、34mという恐らく現人類の誰もが経験したことのない大津波に対して、事前に何をどのように備えればよいのかという疑問が一瞬でも脳裏を横切ったのは私だけだったでしょうか。このような中で、今なお大飯原発の2基を除く全国48基の原発が運転停止状態に陥っており、日本経済はますます活力を失いつつあるように感じられます。

国会では、社会保障と税の一体改革と称した年金・消費税問題等々のいわゆる財源問題については一応の決着をみましたが、1千兆円という想像を絶する借金を抱え極度の財政難にあえいでいる一方で、ミヤンマーという国に対する3千億円もの債権をいとも簡単に放棄してしまう、その理由や成り行きはどうであれ、我々一般国民には何かしら釈然としないものを覚えます。そのほか、尖閣・竹島をはじめとする領土問題も一向に埒があきません。とにかく、今や日本列島は災害列島のみならず、今後一体何をどのようにすればよいのか全く見通すことの出来ない「迷走列島」と化してしまっているようです。

このような中で、本県のり養殖漁業については、総体的には適度な降雨による栄養塩補給と下物の相場高に支えられた旺盛な生産努力等により、平成16年漁期以来の140億円を超えるまずまずの生産実績となりました。しかしながら、イカナゴ漁については成長が例年よりも随分早かったことに加え、魚価の低迷などから比較的早期に終漁せざるを得なくなりましたし、その他の漁業についても不漁イコール魚価安が常態化しているように感じとれる一年でありました。また、但馬の漁業についても、慢性的な魚価安に加えて、時化のために出漁できない日が長期間続いたことや、豪雪による観光客の大幅減少等から、民宿需要を含めた産地消費が大きく低迷するなどの非常に厳しい状況でありました。

これらのことから、本県においても「ぎょさい」の重要性が改めて認識された一年ではありましたが、一方で、今後10年程度を見通した水産基本計画の見直しの中で、「ぎょさい」と「漁業収入安定対策事業」が重要施策の1つに位置づけられたことは誠にもって意義深いことであり、私ども漁業共済組合としましても、引き続き、これら制度内容の浸透・定着と加入の普遍化に向けて全力を傾注してまいります。どうか、今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願いを申し上げ、年頭のご挨拶といたします。

新しい年を迎えて

兵庫県農政環境部農林水産局
水産課長
藤澤 崇夫

新年あけましておめでとうございます。

皆様には、清々しく新春をお迎えのことと心からお喜び申し上げます。新しい年が希望に満ちた一年となりますよう、心からご祈念申し上げます。

さて、昨年は国の内外で様々な動きがあった1年でした。特に周辺諸国との関係においては、竹島や尖閣諸島をめぐる軋轢、中国における大規模な反日デモや北朝鮮のミサイル問題など、外交的な課題が顕著になった年でした。中でも竹島や北朝鮮の問題は、日本海側への波及等、本県但馬地域の漁業にとっても大変心配な事案です。

国内においては、円高やデフレの長期化、市場価格の下落や消費の冷え込みなど、経済社会の不透明感が続く中、EPA・FTAをはじめ、TPPなどにより国際的な貿易自由化の流れが加速しており、農林水産業も世界的な動きを無視することはできません。特に漁業においては燃油価格の高止まり等、厳しい状態が続いていますが、私達関係者はこれからも連携を密に、創意工夫をもって閉塞感を打破していきたいところです。

このような中、県では昨年3月に、今後実現すべき農林水産業の姿と行動指針を示した「ひょうご農林水産ビジョン2020」を策定いたしました。特に水産業については、藻場・干潟の保全や海域の栄養塩管理による豊かな海の創生、水産資源の持続的な利用の確保、安定的な漁業経営の育成、ブランド力の強化や魚食普及活動の推進などにより、安全な県産水産物を安定的に供給する体制を確保する施策を位置づけています。

本県には瀬戸内海と日本海という豊かな海があり、そこで営まれる漁業は、県民・国民にとって不可欠な食料供給産業であるとともに、海域の環境保全など多くの役割を担う大切な財産といえます。JF兵庫漁連の山田会長をはじめ系統の皆様におかれましては、この財産を次世代に引き継ぐべく、豊かな海の再生と関連法整備の実現に向け、関係府県の先頭に立って積極的な活動を展開されています。関係者の皆様が日々尽力されておられることに対し、心より敬意を表しますとともに、県といたしましても、皆様が将来にわたり希望をもって漁業を続けていけるよう、力強い水産業の実現に向けて努力してまいりますので、水産業の更なる発展に引き続きご尽力下さいますようお願い申し上げます。

新たな年の始まりとともに、本県水産業が益々発展し、未来に向かって力強く前進されますことと、新しい年も平穏で安全な操業が続き、豊かな海の幸に恵まれますことを心より祈念いたしまして、新年のご挨拶といたします。

新年のご挨拶

兵庫県立水産技術センター
所長
反田 實

新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては気分新たに清々しい新年をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

さて、昨年度の瀬戸内海はノリ養殖やチリメンの好漁など明るい話題もありましたが、一方で、底びき網漁は依然として厳しい状態が続いています。また、今冬の栄養塩濃度は昨年よりも低く、引き続きノリ養殖環境には注意が必要です。このような中、昨秋には中央環境審議会から答申「瀬戸内海における今後の目指すべき将来像と環境保全・再生の在り方について」が出され、これからの環境施策について新たな考え方が示されました。これは、一昨年来の業界、行政が一体となった取り組みの大きい成果であると思います。今後も豊かな海の実現を目指した取り組みを継続する必要があります。水産技術センターにおいても豊かな海づくりの推進に役立つ科学的情報の提供に引き続き努めていく所存です。

漁場環境の改善には浅場の造成や二枚貝類の増殖が重要であることから、昨年に引き続き浅場造成に向けた試験研究やアサリなどの二枚貝類の資源増大技術の開発を進めます。また、今後の漁業生産構造の変化に対応すべく、ワカメ、ヒジキなどの養殖技術の開発のほか、ノリの優良品種開発、カキ養殖技術研究にも取り組む所存です。さらに、漁港を「稚魚を育てるゆりかご」としても活用していくために必要な新たな整備手法の検討を進めます。イカナゴ、シラスについても引き続き漁況予測精度の向上に努めます。

年頭のご挨拶

兵庫県農政環境部農林水産局
漁港課長
林 健児

新年あけましておめでとうございます。

皆様方には、清々しい新春を健やかにお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

昨年を振り返ってみますと、3月に、県では「ひょうご農林水産ビジョン2020」が策定され、国では、新たな「漁港漁場整備長期計画」が閣議決定され、漁港整備における新たなスタートの年となりました。

本年も、「ひょうご農林水産ビジョン2020」に掲げる①資源培養型水産業の推進、②豊かな里海づくり、③災害に強い農山漁村づくりを施策目標に、力強い水産業づくりを目指して、漁港整備に取り組んでまいります。

日本海では新漁業調査船「たじま」の計量魚探を活用し、ホタルイカや大型クラゲの出現状況や来遊量を定量的に把握する技術の検討を進めます。また、ハタハタやズワイガニ、ソデイカの漁況予測など、漁業者の皆さまに役立つ情報の迅速な発信に引き続き努めてまいります。但馬地域で最も重要なズワイガニについては、漁期以外のカニを保護するための漁具の改良を行うとともに、増殖場の有効活用を図るため、最新の標識をつけて行動の追跡調査を行うなど、生態的情報も活用した増殖場のより有効な管理手法の開発を進めます。また、沿岸漁業については、沿岸資源の新たな利活用を図るため、海藻であるホンダワラ類の資源管理から加工までを含めた有効利用に関する調査研究を開始します。

今後とも本県水産業の発展に鋭意努力して参りますので、昨年に引き続きご支援ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

新しい年が皆様にとって実り多い年となりますよう祈念申し上げて、新年のご挨拶と致します。

また、昨年は、新たな試みとして「魚を育てる漁港」の調査にも着手しました。本年は、その成果も含めて新たな展開ができることを楽しみにしています。

一方、地震・津波対策につきましては、昨年8月に、内閣府から南海トラフの巨大地震にともなう津波想定が公表されました。公表内容は、これまで、県が暫定的に定めてきた通常津波の2倍想定を越えるものではありませんが、それでも県下で4千5百ヘクタールが浸水するという甚大な被害が想定されています。そのため、本年は、「津波防災緊急インフラ五箇年計画」の策定し、安全・安心な漁村づくりに取り組んでまいります。

昨年末の衆議院選挙の結果、政権が交代し、国の予算編成も、年明けから始まることとなります。経済対策や防災対策などの課題に対しても、柔軟に取り組んでまいりますので、皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、本年一年の皆様のご健康とご活躍をお祈りいたしまして、年頭のご挨拶といたします。

年頭のご挨拶

全国漁業協同組合連合会
代表理事会長
服部 郁弘

新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、全国の皆様に謹んで新年のご挨拶を申しあげます。

振りかえれば、国連が定めた「国際協同組合年」であった昨年は、日本の協同組合が連携し、協同組合の発展の促進や社会的認知度の向上を目的とし、各地でさまざまな取り組みが進められました。JFグループにおいても、各県域で他の協同組合と協調した運動により、JFの価値や役割を見つめ直し、その存在意義を社会に大いにアピールできたのではないかと思います。

こうした取り組みによりJFや漁業の理解・認知が社会に浸透する一方で、九州北部豪雨に代表される異常気象、燃油の変わらずの高止まり、福島第一原発事故による風評被害など漁業者には多くの逆風が吹きました。

さらに、年末には再びTPPについて、積極的な取り組み推進が明言されるなど、我々にとって看過できない主張も再び声高にされ始めております。

東日本大震災で被災した地域では、関係者の努力の結果、着実に復興の取り組みが進められておりますが、漁業の真の復活に必要なインフラ整備は未だ十分とは言えない状況にあります。このような状況下、復興への尊い努力を重ねている仲間の歩みが続けられるよう、漁業やJFの価値・役割・機能について国民に十分ご理解をいただき、浜に本当の笑顔が戻るよう、強力な支援を求めて参る所存であります。

また、2013年度水産予算は、前年度を上回る大型の概算要求となりました。足腰の強い水産業の構築を実現し、更なる社会への貢献をはたしていくことこそ、JFグループの責務であり、与えられた役割であろうと考えます。

JF全漁連と致しましても、グループの責務を全うするために、まず役職員一丸となって経営再建計画を早期に達成し、組合員・会員の皆様をはじめ社会からも信頼される組織・事業を実現することを最優先で取り組んで参ります。会員の皆様方におかれましては、引き続きご理解とご協力をお願い申しあげます。

最後に、この一年が皆様方にとりまして良い年でありますよう、また海上安全と一層のご繁栄・ご健勝をお祈り申しあげ、新年のご挨拶と致します。

新年のご挨拶

全国共済水産業協同組合連合会
代表理事会長
鎌田 光夫

新しい年を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

あらためまして、一昨年の3月11日に発生いたしました東日本大震災により亡くなられた漁業者をはじめ多くの方々へのご冥福と被災され不自由な生活を余儀なくされている皆様に心からお見舞いを申し上げます。

さて、JF共済を取り巻く環境は、東日本大震災で被災された漁業、漁村における復興・再生への立ち遅れ、福島第一原発放射能漏れ事故による風評被害、さらには、国を二分するような論議となっておりますTPPへの交渉参加問題など、先行き不透明で相変わらず厳しい状況が続いております。

このような状況のもと、平成24年度はJF共済3か年計画の中間年度として、引き続き、組合員の生活の安定を目指し、被災地におけるJFの機能回復を支援するとともに、3か年計画に掲げた諸施策を着実に実践していくことで、主要課題である共済事業量の必達に向け全力で取り組んでいるところであります。

こうした中、JF共済の加入実績は、生活総合共済「くらし」においては、前年度に比べ若干伸び悩みが見られるものの、生命共済「チョコー」においては、一時払養老共済「お宝」効果も相まって好調に推移しております。しかしながら、「お宝」を除いた「チョコー」の加入実績は、いまだ十分とは言えない水準にあることから、年度末に向けた強力な推進活動により、最重要課題であります目標達成に最大限の努力を図ってまいりたい、と考えております。

また、新ソルベンシー・マージン基準に対応し、経営の健全性を強化するため、平成24年度を初年度とする3か年の増資計画をすすめているところでありますが、非常に厳しい事業環境の中、昨年の10月末時点で、すでに出資引受額は出資要請額のおよそ75%を超えましたことをご報告申し上げますとともに、関係者各位には特段のご理解とご尽力をいただきましたことに、厚くお礼を申し上げます。

多くの経営課題がありますが、本年も、事業量目標の必達、さらには、東日本大震災への対応はもちろんではありますが、マネジメント改革の推進や、引き続き増資、計画の実行、漁業者ねんきんの改善措置の検討につきましても、お力添えをいただきながら、順次、強力にすすめてまいる所存であります。

どうか引き続き皆様のご支援、ご協力を賜わりますよう、切にお願いを申し上げる次第でございます。最後になりましたが、わが国漁業の明るい未来とJFグループがますます発展することを祈念いたしますとともに、皆様方のますますのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。

由良町漁業協同組合 発足
～ＪＦ由良町中央・ＪＦ由良が合併しました～

1月1日(火)、新しく「由良町漁業協同組合」(JF由良町)が発足しました。

漁獲量の減少、組合員の高齢化等、組合経営を取り巻く環境が厳しくなる中、JF由良町中央、JF由良においても組合員の負託に応えるべく合併についての話し合いがなされてきました。昨年10月に合併仮契約を調印した後も、合併に向けた協議を重ね、組合員・役職員の皆さんのご尽力により、この度、実現することができました。新しいＪＦ由良町は、組合員数327名（正組合員：305名　准組合員：22名）となり、武田 政和氏が代表理事組合長に就任されました。事務所は旧JF由良町中央と同じになります。

なお、今回の合併に伴い県下の組合数は40となりました。

由良町漁業協同組合：〒656-2541　洲本市由良1-20-29　　電話：079（927）0555

※新ＪＦの連絡先は旧ＪＦ由良町中央と同じです。

第37回通常総会 開催される

JF兵庫漁連

挨拶に立つ山田会長

12月10日（月）水産会館（明石市）において、JF兵庫漁連第37回通常総会が、兵庫県農林水産局 三浦 恒夫局長、農林中央金庫大阪支店 奥山 栄二副支店長をはじめ、JF組合長及び系統団体から多数の出席者を迎え開催されました。

開会にあたりJF兵庫漁連 山田 隆義会長は、この１年を振り返り「瀬戸内海の“豊かな海”再生の取組みや、漁業者の転落事故を防ぐ方策としての浮力合羽の推進などを行ってきた。次年度も漁業者のために何が出来るのかを考え、様々な取組みを行っていきたいと考えている。」と挨拶があった後、来賓の三浦 恒夫農林水産局長（井戸 敏三兵庫県知事の祝辞代読）、農林中央金庫 奥山 栄二副支店長から祝辞がありました。また服部 郁夫JF全漁連会長のメッセージが披露されました。

37期の事業実績は、ノリ養殖業が数年ぶりの豊漁であったことに加え、カキ養殖・船曳網漁業も順調に推移したことから、購買事業・販売事業ともに計画を大きく上回り、事業総取扱高256億、事業利益１億５千９百万円（計画対比４千５百万円増）、経常利益１億５千４百万円（計画対比８千７百万円増）となりました。

また、任期満了に伴う役員選任も行われ、現役員全員が再任されました。

第1回乾のり入札会を開催

JF兵庫漁連 のり海藻事業本部

JF兵庫漁連は、今漁期の第1回乾のり入札会を12月17日（月）JF兵庫漁連のり流通センター（加古郡播磨町）で開催し、集まった多くの人々で会場は熱気に包まれました。この日〝兵庫のり〟を求めて集まった商社は全国から46社（約100人）で、500箱を超える見本のノリを手にとり、次々に品定めをしていきました。

共販枚数は、高水温の影響で出遅れた前年に比べ約2、960万枚増の4、155万枚。JF兵庫漁連では「今年の水温降下は順調であったが、摘採の時期に風が強く吹き、今回は予想枚数を下回る結果となった。現在は順調に進んでおり今後に期待したい」としています。

初共販の挨拶で、JF兵庫漁連突々 淳参事が「生産者から良い状況であると聞いており、次回は1億枚を超える上場を見込んでいる。現在、ノリ漁場を良くするための取組みとして、新しい瀬戸内海再生法の制定運動を行っており、漁場再生に努めていく」とし、また、兵庫海苔入札指定商組合 松谷 晃理事長（松谷海苔㈱社長）は「業界は厳しい状況だが、ノリという財産が我々にはある。その価値観を高めていく努力が今後求められている。生産者には今後も高品質のノリ生産をお願いしたい」とされ、本県のノリ養殖に期待を寄せられました。

今漁期の入札会は13回開催され、最終共販日は5月8日（水）となります。

（第1回乾のり入札会：結果）

共販枚数	4,155万枚
共販金額	4億9,203万円
平均単価	11円82銭
最高値	37円39銭（明石浦・新優）

早朝から多くの方が詰めかけました

松谷理事長の挨拶がありました

砂問題について考える
「第1回 砂問題研究会」
～豊かな森川海を育てる会が公開講座を開催～

㈶兵庫県水産振興基金

瀬戸内海がきれいになったといわれながら、漁獲量は減少しています。その原因を追究するためにさまざまな活動が行われていますが、豊かな森川海を育てる会（会長：島本 信夫 元但馬水産技術センター所長）が進めている土砂循環に関する研究もその1つです。

同会では、森や川での多くのダムや河口堰の建設と海での航路浚渫や海砂採取によって、海の土砂の減少がもたらされ、豊かな生態系が損なわれたとの問題意識をベースに、森川海を巡る土砂の循環を回復させるための提言をまとめることを目標として、調査研究を行っています。

その一環として同会は、12月2日（日）に神戸市垂水区で公開講座として砂問題研究会を開催しました。約50人が参加し、来賓としてJF兵庫漁連 山田 隆義会長は「瀬戸内海再生法の制定に向けた努力を重ねている。行政OB職員が豊かな海を取り戻すための活動を始められたのは大変心強い。国民の支持がないとこのような運動は前進しない。協調して取り組んで行きたい。」と挨拶され、水産業界としても全面的に協力していくことを表明されました。

挨拶に立つ豊かな森川海を育てる会 島本会長

当日のプログラムは、行政からの話題提供として、兵庫県水産課 中桐 栄主査から「千種川の河川工事で発生した川砂を利用した増殖場造成の取り組み」が報告され、続いて京都大学大学院 藤原 建紀教授による「海から見た砂問題」と題する講演が行われ、最後に参加者による意見交換が行われました。

中桐主査の報告は、「水深10メートル前後の海域で発生する貧酸素水塊を抑制するため、千種川の河川改修で発生した砂を活用してたつの市地先で増殖場造成工事を行っている。これまで経験のない事業であるが、事業効果のモニタリングを行い、河川堆積砂や浚渫土砂を利用した漁場整備を進めて行きたい」という内容でした。

藤原教授の講演主旨は、別掲のとおりですが、「2000年以降、陸からの窒素・リンが急減し、沖合海域は極端な貧栄養になっている。現在は岸近くが豊かになり、生物生産能力が大きい。稚魚期を過ごす岸近くの整備が重要」と話されました。

意見交換では、土木事業に携わった県職員OBから「河川の砂を海に戻す必要性を強く感じる。やるべきだった。」などの意見が出されました。

藤原教授からは、「瀬戸内海では外洋からの砂の供給は望めない。今後も航路浚渫や河川改修は続くので、公共工事に当たっては、砂を海に戻す取組みが必要」との見解が示されました。

藤原教授の講演主旨

1：瀬戸内海の砂は「化石砂」

陸からの砂の供給は少なく、取ってしまうとなくなる（なくなった）。

2万年前（石器時代）、瀬戸内海が陸だったころの砂が瀬（鹿ノ瀬、室津ノ瀬など）を作っている。

2：イカナゴ（魚）

海砂採取により産卵・夏眠場がなくなり、資源が減ってしまった魚、海砂採取をやめると濁りが減り、アマモが生えるようになったが、イカナゴ資源の回復はみられない。

3：ウチムラサキ（貝）

海底の砂礫質の底質がなくなり、生息できなくなった（東二見沖）

4：瀬戸内海の生物生産構造の変遷（甲子園浜などを例に）

現在は、岸近く、港湾域が漁業資源再生産のキーエリアになっている。

砂の重要性を説く藤原教授

ようそろ

～ずっと真っ直ぐに～

（ようそろとは航海用語で「宜しく候」の意。主に船を直進させるときの号令として使われる）

《還暦の歳に思う》

兵庫県内海漁船保険組合 専務理事　沢辺 義典

新年を寿ぎ、皆様には誠におめでとうございます。

拓水の紙面に彩りを添えるための新企画「ようそろ」の第1号としてご指名を受けましたので、思いつくままに書かせていただきます。

♬いつのことだか　思い出してごらん　あんなことこんなことあったでしょう。うれしかったこと　おもしろかったこと　いつになってもわすれない♬

〝思い出のアルバム〟という歌であるが、息子の卒園式で聞いたことがある。この歳になると、涙腺が相当にゆるくなってきており、当時を思い出すと目頭が熱くなる。

そう、今年、還暦の歳を迎える。

この60年間、あまりメンテナンスもせずに、よくもったなあ、と思う。この先何年もつのやろ、と思う。が、あまり深刻に考えないほうがいいのかな、とも思う。そうしようと思う。そして、この〝思い出のアルバム〟の歌のように、嬉しかったことを思い出してみよう、と思う。

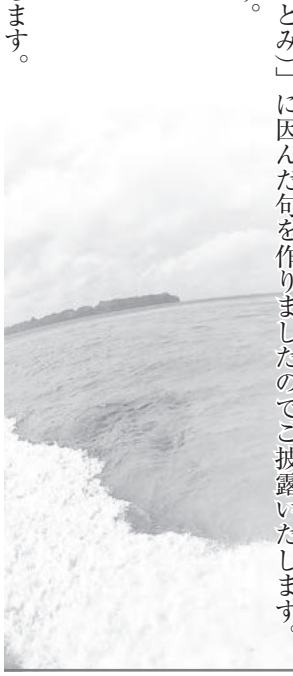
息子2人が誕生し、元気いっぱいに成長してくれたこと。2人とも希望する会社に就職できたこと。長男は、昨年結婚して、可愛いお嫁さんと東京で新婚生活を送っていること。次男は、鹿児島で元気に仕事して、毎晩のように焼酎を飲んで、独身生活を満喫していること。私達夫婦は、空気のような関係が保たれていること。そして何より、漁船保険組合という素晴らしい職場に恵まれたこと。

思い出のアルバムのページが、歳を重ねる毎に増えていく。そのページをめくる度に、♬うれしかったこと　おもしろかったこと　いつになってもわすれない♬と、感謝の気持ちが溢れてくる。今年は、そんな感謝の一年でありたいと思う。

おわりに、今年の干支「癸巳（みずのとみ）」に因んだ句を作りましたのでご披露いたします。皆様のご批評などいただければ幸いです。

み…海水（みず）澄みて
ず…住めぬ海など
の…のぞみなく
と…富める海（わだつみ）
み…みな思うこと

どうぞ、本年もよろしくお願いいたします。



女性部ら総出でカキ汁を振舞う

～観光バス38台で賑わう室津港～

㈶兵庫県水産振興基金

12月14日(金)ＪＦ室津(中川　照央組合長)が旅行社とタイアップして、訪れた多くの観光客にカキ汁を振る舞ったほか、加工品などの販売をおこない、地元水産物のＰＲに努めました。

今回企画された「赤穂義士祭と室津漁協大感謝祭の旅」は、赤穂市での義士祭の前後に、観光バスが室津漁港に立ち寄り、観光客にカキ汁を振る舞うほか、チリメンや地元で水揚げされた魚のミリン干し、干しガレイなどが並べられた即売会を行うというものでした。この日は朝早くから、ＪＦ職員や同ＪＦ女性部（本多 春代部長）が「千人鍋」と呼ばれる大鍋でカキ汁を調理したほか、即売の商品として同女性部が運営する魚魚市（とといち）の加工品や、地元加工業者の商品も並べられました。

観光バスは合計38台（約1,400人）でその3分の2は午前中同じような時間に集中して到着しましたが、カキ汁配布のコーナーは、何度もイベントを経験している女性部スタッフにより手際よく盛り付けが行われたため目立った混雑もなく、受け取った観光客はアツアツのカキ汁に舌鼓を打っていました。即売会も大賑わいで、浜の周りの加工場の直売コーナーにも人があふれるほどの盛況ぶりでした。

中川組合長は「これだけの観光バスを受入れるのは初めてだった。機会があれば来年以降も受入れて、“室津”をＰＲしたい」と話されました

手際よく注がれるカキ汁

浜は活気に包まれ、大変な賑わいを見せました！

「豊かな森川海を育てる会」主催の 砂防堰堤見学会に参加しました

㈶兵庫県水産振興基金

砂防堰堤は川の上流部につくられる土砂災害を防止するためのもので、六甲山地には現在525基もの砂防堰堤があります。「豊かな森川海を育てる会」が、砂防堰堤を実際に見て知識を深めようと開催した見学会に、JF兵庫漁連と当基金から4名が参加しました。

12月20日（木）、参加者12名は国土交通省六甲砂防事務所の担当者に先導され、現場近くの登山口に到着。そこで砂防堰堤の仕組みや機能などについて説明を受けたあと、急坂を登り、まず五助堰堤を見学しました。

この堰堤は、阪神大水害等の災害を教訓に昭和32年に完成しました。昭和42年に発生した集中豪雨では、それまで土砂堆積が僅かだったところに、一夜にして12万㎥の土砂が流れ込み、埋め尽くされたとのことです。堰堤の種類は、土砂を貯めて溢れるものだけを流す不透過式堰堤とよばれるもので、土砂の除去などのメンテナンスの手間は無く、ほぼ堰堤上部まで埋まった今の状態でも十分機能しているとのことでした。堰堤の埋まったところには樹木が生え、豊かな水の流れをもつ湿原が形成され、過去に大規模な土石流があったとは思えない風景が広がっていました。

六甲山系119番目に建設された「五助堰堤」（不透過式）

急峻な登山道を登り、砂防堰堤を目指す

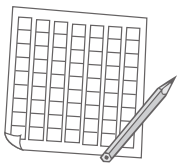
次に東谷堰堤群とよばれる中の1つで平成22年に完成した透過式堰堤を見学しました。堰堤中央部は組み合わせた鋼材を設置し、普段は水や土砂を流すが、土石流発生時には大きな石や流木は止めるというもので、水生生物の行き来の妨げにならない構造になっているとのことでした。

説明役の同砂防事務所 森東課長は「不透過式と透過式はその現場の状況で判断し建設している。ただ堰堤を作ったからといって、防災面はこれだけで万全とは言えない」とし「堰堤だけでなく、森林の砂防機能や保水力を生かす「六甲山系グリーンベルト整備事業」などをふまえ、総合治水を行っていく必要がある」とされ、参加者は熱心に耳を傾けていました。

急峻な渓谷では土石流の発生を防ぐ必要がある一方、堰堤によって海に流れ込む砂の量が少なくなったと私たち漁業関係者は訴えています。豊かな海を取り戻すためにも、お互いの理解をすすめる一方、森づくりの必要性をさらに広く訴えていくことが重要だということを再確認しました。

近年増えつつある透過式堰堤

受賞者決定!!



＜兵庫県知事賞＞

食べつがれる明石の魚

明石市立明石小学校　5年　鈴木（すずき）　達野（たつや）

僕は明石の魚が大好きです。誕生日のときはいつも明石で獲れたカレイの煮付けなど、明石の魚を食べています。

でも、僕の友達の中には魚より肉の方が好きという子がたくさんいます。魚を好まない理由は二つあります。一つ目、骨があって食べづらい。二つ目、生臭くていやだ。そう言われるとそのような気もします。けれども、魚の身はおいしくて、特に鯛の目の辺りの身はプリプリしています。このようにおいしいことを思えば、面倒くさくても骨なんか取ればいいじゃないかと考えることができます。僕は友達のみんなにそう考えて食べてもらって、好きになってもらいたいです。

僕が魚を好きになったのは、おばあちゃんが作る魚料理がおいしかったからだと思います。おばあちゃんの家は明石で獲れた魚を加工して、ちりめんじゃこなどを作る商売をしていたらしいです。だから、おばあちゃんは小さい頃から明石の魚を食べて育ってきました。おばあちゃんの話では、昔に比べて魚の獲れる量が減ってきているみたいです。原因は良く分かりませんが、人間が海にゴミを捨てたり、埋立てをしたりして、魚のすみかが減ったのかもしれません。去年、社会科の勉強で、漁師さんは魚がすみやすいようにタコツボを海に沈めたり、小さな魚を獲らないようにしていることを知りました。このように漁師さんたちもがんばっているので、僕たちも海を汚さないように気をつけたいと思います。

海は人間のものではなく、生き物全てのものです。人間たちが魚をいっぱい食べたいから、海の自然を守ろうというのではなく、海から命を分けてもらっていることを第一に考えるべきだと思います。だから、海に住む生き物たちがいつまでも住み続けられるような、豊かな海であってほしいです。そのためには、自分たち一人一人がゴミを捨てたり、汚したりしないようにしなければなりません。そうやってみんなが、海を大切にしようという思いがあれば、僕のおばあちゃんが小さい頃のような、豊かな海がもどってくるに違いありません。僕は、僕の子供や孫あるいはもっと未来の子孫にも、僕が食べているようなおいしい魚を食べてほしいと願っています。

【作文部門】

（敬称略）

賞　　名	学校名	学年	お名前	題名
兵庫県知事賞	明石市立明石小学校	5	鈴木　達野	食べつがれる明石の魚
兵庫県教育長賞	姫路市立飾磨東中学校	3	水田　美紅	私が海を嫌いな理由
ＪＦ兵庫漁連会長賞	洲本市立広石小学校	2	森岡　はな	お魚のこと
	姫路市立飾磨東中学校	3	岸本　真奈	私の海
ＪＦ兵庫女性連会長賞	淡路市立石屋小学校	3	東根　碧海	日本一のちりめんりょうし
	南あわじ市立灘小学校	6	松本　陵樹	漁業をしているお父さん
ＪＦ兵庫信漁連会長賞	淡路市立石屋小学校	4	長井　胡桃	私たちの海
	姫路市立神南中学校	2	松田　祐人	漁業や海について思うこと
農林中央金庫大阪支店長賞	淡路市立石屋小学校	4	藤井伊富希	田ノ代海岸の海の様子
	姫路市立飾磨東中学校	3	須貝　　綾	かけがえのない海

※佳作は省略しています。

○ＪＦ兵庫漁連HPで、兵庫県知事賞と兵庫県教育長賞の作文を掲載中！
○2月下旬頃に、全受賞作品（30作品）を掲載した“ひょうご海の子作文集”を発刊予定です。

平成24年度「ひょうご海の子作品展」

ＪＦ兵庫漁連とＪＦ兵庫女性連は、輝く未来を担う小中学生に、海を愛し、美しく豊かな海を守る事の大切さと漁業に親しむ心を育んでもらうため、「ひょうご海の子作品」（絵画・作文）を県下の小中学生を対象に募集し、絵画3,398点作文194点のご応募をいただきました。

10月30日に絵画部門、12月14日に作文部門の最終審査会を行い、受賞作品が決定いたしました。

【絵画部門】

（敬称略）

賞　　名	学校名	学年	お名前	題名
兵庫県知事賞	播磨町立蓮池小学校	5	佐伯　優衣	豊かで美しい海
兵庫県教育長賞	姫路市立香呂小学校	4	大谷　駿介	海からはえてきた枝豆
ＪＦ兵庫漁連会長賞	三田市立三田小学校	2	柳川　薫子	カラフルなうみのなかまたち
	神戸市立本山中学校	3	小栗　優実	出発前の戎丸
ＪＦ兵庫女性連会長賞	福崎町立八千種小学校	3	水田　翔大	きれいな海
	明石市立二見小学校	4	中出　月那	つぼからタコが出てきたぞ
ＪＦ兵庫信漁連会長賞	養父市立広谷小学校	1	川島　謙真	ふねにのったよ
	明石市立二見小学校	4	若山菜々峰	大漁だ～
農林中央金庫大阪支店長賞	南あわじ市立湊小学校	4	齋藤　友果	漁師さんと魚たち
	宍粟市立山崎小学校	6	中村　　彩	いかなご漁

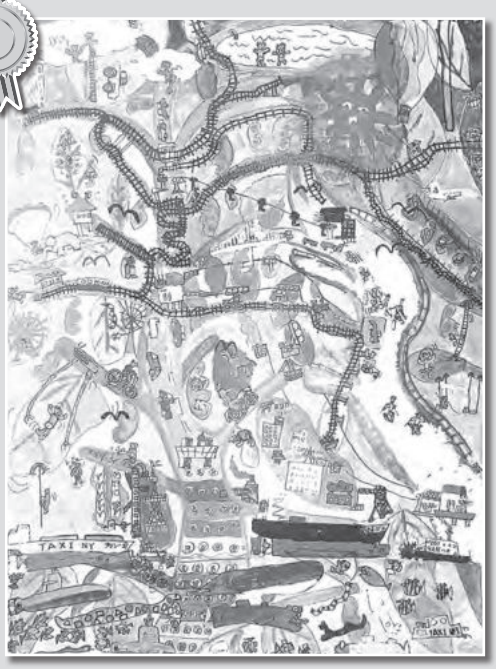
※佳作は省略しています。

○平成25年1月7日～平成25年3月末日（土日祝日を除く）まで、兵庫県水産会館1階で受賞作品の展示会を開催中！近くへお越しの際は一度見学してみてください！

○ＪＦ兵庫漁連HPでも受賞作品を掲載中！（ http://www.seat-sakana.net/ ）

＜知事賞＞

播磨町立蓮池小学校 ５年 **佐伯（さえき） 優衣（ゆい）**さん



＜教育長賞＞

姫路市立香呂小学校 ４年 **大谷（おおたに） 駿介（しゅんすけ）**さん

JF兵庫漁連が開発した浮力合羽
～販売総数 1,500着を突破～

ＪＦ兵庫漁連（山田 隆義会長）が4月から独自に企画し、改良を重ねた“浮力合羽”を今秋から販売を始め、この11月末までの販売総数で1,500着を突破しました。

この合羽は、同漁連が海難事故の防止を目的に「何とか漁業者に着てもらいたい」との思いで、合羽に浮力を持たせたものを考案し、浮力実験と改良を重ねて、この度販売にこぎつけたものです。

開発に当たっては、漁連職員が着用して実際に水に飛び込んだうえで、水に浮く姿勢を実験したり、試験的に着用してもらった漁業者からの漁労作業における着心地や、作業性について意見を聞いているため、販売時から評判は上々です。

また購入に際しては、同漁連をはじめ県系統団体では、県内ＪＦ組合員向けには1着につき3,000円の補助を行うことによって通常の合羽と同等程度の価格帯に設定するなどの支援策を講じています。

同漁連では海中転落による海難事故が後を絶たない現状のもと、この浮力合羽によって、こうした事故が1件でも防ぐことが出来ればとの思いから、今後も積極的に普及していきたいと考えています。

この浮力合羽の申し込み・お問い合わせにつきましては、各ＪＦまたはＪＦ兵庫漁連 資材部 **(TEL：078-942-9272)** までお問い合わせください。

実際にＪＦ兵庫漁連職員が浮力合羽を着用し飛び込んだときの様子

合併20周年 ふれあいフェスタ開催

ＪＡあかしは11月23日（金）、農産物直売所（フレッシュ・モア大久保店）で合併20周年記念事業「ＪＡあかし ふれあいフェスタ2012」を開催しました。あいにくの小雨にもかかわらず、フェスタは終日多くの来場者でにぎわいました。

会場には、組合員・利用者に日頃の感謝の気持ちを込め、生産者・職員による模擬店・事業相談コーナーなど多数のブースを設置。野菜コーナーには、新鮮な明石産キャベツの特売やたまねぎ詰め放題のコーナーを設けました。お米コーナーでは、今年10月に「ひょうご安心ブランド農産物」の認証を受けたヘアリーベッチを使い、減化学肥料・減農薬で栽培した特別栽培米ひのひかり「花美人」を販売し、来店者に積極的にＰＲしました。

また、イベントステージは、神戸出身のミュージシャン 羽越（うえつ）カレンさんとあかし玉子焼きひろめ隊マスコットキャラクター「ひろめちゃん」による歌とダンスで大いに盛り上がりました。地元明石北高校音楽部総勢50人の迫力あるマーチングと演奏も、会場を沸かせました。

ＪＡあかしは今後も、「地域への貢献、地域との共存」をキーワードにして地域に密着した事業活動に取り組みます。

http://ja-grp-hyogo.ja-hyoinf.jp/

生協祭を開催！
～関西学院大学生協協同組合～

関西学院大学生活協同組合では、10月16日（火）から18日（木）まで西宮上ケ原キャンパス、神戸三田キャンパスそれぞれで生協祭を開催しました。

西宮上ケ原キャンパスでは、学生会館前の広場にテントを建て、古本市、自転車無料点検、ドライヴィングシミュレーター体験などの企画を実施しました。そのほか東日本大震災の被災地復興支援を行っているグループをはじめ、様々な活動を行っている学生団体の参加も昨年の４組から６組に増え、普段の活動をアピールしました。また、西宮市職員生協にもバザーのご参加をいただき、生協祭を盛り上げていただきました。２日目、３日目は雨模様であいにくの天候となりましたが、３日間を通して多くの組合員が来場しました。

学生会館内では、宝塚医療生協による骨密度・血圧・体組成測定、大学保健館によるアルコールパッチテスト・スモーカライザー・胸骨圧迫法体験、栄養士による食生活相談などを実施。さまざまな生協の仲間との交流が深まりました。

さらに10月21日（日）午後からは生協祭特別企画として、「武器としての決断思考」などの著書で有名な瀧本哲史氏の講演会を開催。こちらも盛況でした。

一方、神戸三田キャンパスでは、生協祭特別メニューの焼きたてパンやサラダバー1ｇ１円バイキングなど、組合員に喜んでいただきました。

http://www.coop-hyogo-union.or.jp/

旬に想う

写真と文
遊方子

寸・尺・メートル

方向指示板

◆長さを計る《メートル》という単位は、ギリシャ語のメトロン〈尺度〉に由来する。1796年頃、フランスの学者が地球の子午線に沿う大円周の測定をやりとげ、その四千万分の一を1メートルと定義したのが始まりで、メートル原器が作られた。1875年に国際メートル条約を締結、当初の原器をもとにH型の新原器に改めた。日本は1886年に条約に加盟し原器を受領、此れを日本メートル原器として中央度量衡検定所に保管した。この品を国立科学博物館で見た記憶があるが、その後、測定技術が進歩し子午線とメートル原器に誤差が判明、精度を求め光の波長を用いた定義に変更、さらに真空中を進む光の速さを用いる高精度な標準へと改めた。昔の原器は参照程度でしかない。

◆元々、長さを計る単位は人の身体を基準にしている。古代エジプトでは、肘から中指の先迄をキュービトと呼んだ。スポーツの世界では、足の踝から足の指先迄をフィートと呼んで使われた。日本では親指の先から人差し指の先を使って寸や尺が考えられたが、古来の度量衡法の『尺貫法』は1959年に廃止と決まり、取引や証明には使えない。しかし、呉服・畳屋・大工仕事では尺貫法が生きている。酒やビールなども、昔の容量を単位だけメートル法で呼び変えただけであって、使い慣れ生活に密着した基準は、簡単には変えられない。

◆十代の終わり頃、東京大森近くの町工場でレンズ研磨の仕事をしていた。かなりの精度が必要な仕事で、神経を擦り減らした。マイクロメーターやノギスが頼りの作業で、ミリ以下を追及する毎日だった。ノギスは便利な工作器具で、考案したポルトガル人ペトルスノニウスの、ノニウスが訛りノギスとなったという。米英でバーニアキャリバスと呼ぶのは、スライドする副尺を考え出したフランス人ピエールバーニアに因んだものである。長さ・厚さ・球や穴の直径を測るには実に重宝する。マイクロメーターも名の通り、微小な長さを測るのに非常に優れており、ネジの回転と進み具合を旨く活用した計測器具である。

◆「一寸の虫にも五分の魂」や「一寸先は闇」は、単位を3センチと言い換えても、サマにならない。別の言葉が生まれぬ限り、こうした言い回しは変えられまい。「三尺下がって師の影を踏まず」と、師を敬う礼儀の基本があり、「三尺下は地獄」など、三尺が我々の周りには多い。『一尺より向こう、お隣の前を掃いてはいけない』と祖母から聞いた事がある。領域侵犯は一尺以内まで、これが付き合いの心得であり、一尺の心配りで「向こう三軒両隣り」が旨く潤滑する。

大輪田塾だより

「播磨灘の栄養塩状況と食育運動」

大輪田塾12月講座は、11日（火）に行われました。はじめに「今、播磨灘の漁業や漁場環境に何が起きているのか」と題し県水産技術センター 原田 和弘主席研究員が講義を行いました。原田講師は播磨灘の海域データから栄養塩の量が、ノリ養殖のみならず漁船漁業にも影響しているのでないかとしたうえで、様々な栄養塩増加を目的とした活動に加え、浅海域の再生と保全も併せて行う必要があるとされました。

続いて、県健康増進課 脇重 裕子課長補佐を講師に迎え「食育運動について」と題した講義が行われました。兵庫県が行っている食育推進計画やその内容について詳しく解説し「行政だけでなく一般県民も含めた社会全体が“食”について取り組むものである」とされました。

どちらの講義も、終了後には塾生から多くの質問が出るなど、関心の高さが伺われるものとなりました。

播磨灘の状況について講義をする原田主席研究員

脇重課長補佐による“食育”の講義

表紙の言葉

初詣

新年明けましておめでとうございます。

写真は、姫路市の播磨国総社（射楯兵主神社）の初詣の光景です。新しい年に願いを込めて訪れた人々は、拝殿から門の外まで“長蛇”の列をつくっていました。

巳はご存知のとおり蛇を表しております。蛇は抜け殻を財布に入れて蓄財を願う習慣があり、株式などの相場で巳年は“天井”とし上昇傾向がみられるとのこと。

これにあやかって、厳しい環境が続く水産業界ですが、ぜひ「上昇」の年でありますよう祈念いたします。

この1月号から拓水もリニューアルいたしました。気持ちを新たに県内漁業の様々な情報を皆様にお伝えしていきますので、今後ともご愛読の程よろしくお願いいたします。

拓水 TAKUSUI 1 January

発行：財団法人 兵庫県水産振興基金
〒673-0883 明石市中崎1丁目2番3号 兵庫県水産会館2F
TEL 078-919-1331 FAX 078-919-1336